化学部会（２０１１年１２月度）研修会報告(近畿本部共催)

日　時 ： 2011 年 12 月 10 日（土） 15:00～17:00

テーマ ： 講演会

講演１　　化学部門の技術士として　　－自分らしさを基にしたビジネスモデル－

丹生　光雄　技術士（化学・総合技術監理部門）　タンジョウ技術士事務所

技術士になるまでの経験は、ボーキサイト資源の調査、品質管理、セラミックスやアルミナ製品の研究開発、赤泥（ボーキサイトの廃棄物）有効利用法の研究開発などである。技術士合格は在職中であり、退職後始めた技術士としての業務は、①技術士の育成業務、②技術士会での活動、③技術コンサルタント・アドバイザー、④環境審査員(人)、⑤民事調停委員に分類できる。④は技術士らしい業務とはいえないかもしれないが収入源としてのウエートは大きい。①②はボランティア的ではあるが技術士としてやりがいがある業務であり、バランスが重要と考えている。

⑤の民事調停委員について紹介する。民事調停とは、裁判に至らずに解決するための手段のひとつであり、調停主任（判事）と調停委員２名程度で構成する。裁判とは異なり強制力は無いが、簡易な手続、迅速な解決、費用安価、柔軟な合意的解決、非公開が特徴であり、紛争当事者の合意を斡旋することが目的である。調停委員の資質として、公正、社会常識と広い視野、柔軟な思考力、人間関係を調整できる素養などが必要であるが、技術士向きと考える。

技術士は名称独占資格であり、業務独占資格とは異なることに留意が必要であり、定年型技術士、企業内技術士、独立技術士によって異なるが、私の経験も参考に出来るだけ早く自分独自のビジネスモデルを確立されることを期待する。

講演２　　アジア観光地を旅し、日本を振り返る

稲葉　伸一　社団法人近畿化学協会化学技術アドバイザー
神戸大学工学部応用化学科 非常勤講師、青山学院大学理工学部 非常勤講師

仕事での海外出張や家族旅行の中で、近年、中国を含めたアジアを旅することが増え「日本に欠けているもの、失いつつあるもの」が見えてきたと感じている。今日は訪問した各国で写した多くの写真紹介と共に、アジアから見える「日本」を語りたい。

最近、アジアの時代だと言われ始めた。BRICｓ・先進国・新興国が混ざっている状態であるが、住民のバイタリティーにはものすごさを感じる。建設ラッシュや自然破壊も無いとは言えないが、宗教がベースになっており柔らかい印象を受ける。また基本は農業国であり、農業を大切にしながら産業を振興しようとしている姿が見える。

アジアには民族芸能、郷土の土産物、料理、自然、文化遺産などが多く、その底流に素朴な人柄がある。これらの資産は、国家滅亡の危機や植民地化の経験から醸成されたと思われ、伝統民芸文化の再興を図り、観光と開発のためのインフラ投資も着実になされている。先住民族の遺産であっても自国の歴史として活用しており、過去(歴史)は忘れないが拘りはしないという基本線がある。

アジアには自分達が独立（革命）を勝ち取ったとの自信があり、歴史は日本より古い。協調と戦いの連続であったが、貧しくても将来に夢を持つ昔日の日本の姿がある。アジアに対し謙虚になり、上から目線での親日的を求めず、自分から親アジア的になっていく考え方が重要と考える。

（文責　藤橋雅尚　　監修　丹生光雄、稲葉伸一）